

一一重連機関車

東北本線を蒸気機関車が走っていた頃、生家にあの独特の汽笛の音が時々聞こえて来る。一番近い線路は北白川あたりで、直線距離で十キロ以上ある。

あまり聞こえないが、ドンヨリ曇った日や雨の日にはよく聞こえる。高く聞こえる日、低く聞こえる日マチマチである。たまには「シュツシュポツポ」の音やレールの軋む音も聞こえてくる。寝ていて外の空模様が分つたくらいだった。

福島と白石の間は越河の坂と言つて。線路も急な登り下りがきつい。何度か乗つたが、この間は機関車二台繋いで坂を登る。それでもノロノロである。下り列車は福島で二重連にし、白石まで引いてきて切り離す。上りは白石で二重連にする。貨物列車などは駆け足位まで速さが落ちていた様だ。

なぜこんな所に線路を敷いたか、その謂われを聞かされた事があつた。計画では、福島から平らな宮城県の角田市を通り、大河原に出る予定だった。それが計画線路近郊の農民が「機関車が吐き出す煙で農作物に損害を与える」と大反対で、あまりにも大げさになつたので、変更したそうだ。

そして白石は発展し、角田市方面はずつと後に、第三セクターのローカル線だけになつた。

こんな例は宮城県にはもう一カ所ある。古川市で東北本線は、計画では古川市を通る予定だった。しかし例の反対で、小牛田を通つた。新幹線がやつと古川市を通つた。鳴子に行くには小牛田でローカル線に乗換え古川を通る。新幹線が通つても古川近郊の人々は不便だろう。

このような現代になるとは思わなかつたらうし、過ぎ去つて見て感ずる事である。角田市や、古川市民の中には先祖を恨む人が居るだろうか。